

# 研究通信

No.171

1993年1月31日 刊  
日本村落研究学会 大学  
事務局 神戸大学 学  
文学部 社会学研究 勝  
北原 淳・藤井 勝  
神戸市灘区六甲台町1-1  
☎ 078-881-1212  
(内線 4178・4150)

## 四〇周年の節目

坂井達朗

村研四〇周年の大会が天草で開かれると知って、ぜひ参加したいと思った。この一〇年程、毎年のように生憎な都合で断念することが多かった。しかしどうやら行けるのか見当がつかない。そこで博多から水俣へ行き、フェリーで渡るとの御案内に従って、前日の夜には無事迷わずにつくことが出来た。

大会第一日午前中は、国内外の農山漁村に関する個別的な調査を基礎とする自由報告が、午後には共同体論に関する四つの共同研究の中間報告がなされた。中村および有賀についての理論的な考察と、イギリスの村落共同体論に関する歴史的考察二点である。さらに内藤会員による「特別報告・再相続の話」も興味深く拝聴した。第二日の午前中は課題報告「家族経営の危機についての国際比較」が、

日本および韓国の事例についての三点の報告によって行なわれた。午後が共同討議にあてられたことは例年の通りである。取り上げられたテーマから今年の大会での研究報告を拝聴しての雑駁な印象を述べると、まず第一に挙げられるべきは外国との比較への強い関心がうかがわれたことである。それは国際農村社会学会への強い関心にも現われている。

それに関連して次に指摘できるのは、歴史的関心の強さである。村落社会の今日的な課題を歴史の中に捉えようとする強い問題意識が、自由報告のなかにもまた共同報告にもうかがえたのではないだろうか。

これに続いて挙げられるべき特徴は、家族や同族が取り上げられたことである。村落社会の単位としての家族の変化と、それが全体社会の変動にどの様に対応しうるかが、様々な局面において問題とされ、歴史分析の方法としての同族理論の検討が取り上げられた。

「むら」を「いえ」の連合として捉え、それがかかえる現実の問題の解決の糸口を歴史の中にもとめるといふ発想は、かつての村研の基本的動向の一つであった。その意味では古い問題意識が再び戻ってきたと表現することもできよう。しかしこれを単なる一時の「ほんげがえり」に終わらせないために、こうした問題意識の持続されることが大切であると感じた。

研究の動向についてもさることながら、四〇回大会に参加しての強い印象は、総会の議題として提案された村研の組織変革の問題であった。かつて「サロンの」と評された村研の独特の牧歌的な組織や運営方法が、すでに時代の要請に対応し難くなっていることは否めない事実であろう。執行部の方々の御苦心の原案が示され、熱心

な意見が交換された。未だ結論に到達してはいないが、どんな組織でも四〇年たてば再編を迫られて不思議はない。四〇歳にして感わずとは聖人のみのよくすることである。会員全員がおおいに考え感う努力が必要だと痛感した。

(慶應義塾大学)

#### 第四〇回村研大会印象記

武田 共治

今大会は、四〇年もの長い航海を終えた「村研号」が、一時の疲れを癒し、船体の再点検・整備を行い、大漁目指して牛深港を船出した、とても言えるようなものであった。

四〇年もの航海であったのだから、船体にひびが入ったり、計器類が旧式になってしまふのは当然のことである。装いを新たにしたり「日本村落研究学会」が、大海の荒波をどう乗り切るのか。現代日本におけるその存在意義はいかなるものか、私自身も問い続けたかと思う。

ところで、今大会の第一の印象は、新しい村研の担い手層が見えてきたのではないか、ということである。印象記であるから、大会諸報告の内容には立ち入らないが、まず年々報告数が増える傾向にあることが注目される。一九八八年の第三六回大会が九であったが、それ以降一〇、八、一三、と推移し、今大会において一六と最高を記録している。それも、大学院生を含む若手・中堅の報告が増えてきているようである。ここ数年、①共通課題がまともでない、②年

報を会員さえ購入しない、③大会不参加層が固定化してきた、といったことから村研の存続が危ぶまれてきたのであるが、若手・中堅を中心とした会員の研究エネルギーはむしろ増加の傾向にあるわけである。報告が増えればよいというものではないという意見もあろうが、これこそ、「村研号」再出港の原動力であると考えた方がよいと思う。

第二の印象は、会員の研究関心になるほど多様化している、ということである。国際比較といっても、韓国、タイ、イギリスと広がっており、また、これまでの村研報告としては非常に少なかったと思われる方法論に関わる報告が見られたことも印象的であった。中村共同体論の再検討(三溝博之氏)、有賀同族団論の再検討(長谷部弘氏)、ウェーバー研究(野崎敏郎氏)、コーホート分析の適用(池岡義孝氏)、などである。私も過去にそのような報告を考えた時期があったが、どういうわけか、出来る雰囲気ではない、と判断してしまったことがある。今は状況が違うのであり、よいことだと思ふ。これらのことが、共通課題設定の困難性と表裏の関係にあるわけであるが、私としては、徐々に多様性を貫く共通課題の設定が可能になってくるものと楽観している。その点で、新理事会でも話されたことであるが、三溝、長島、國方、長谷部四氏の共同質疑、あるいは高橋明善氏を中心とするグループ報告のようなものの展開が、共通課題の担い手として期待されると思う。

第三に、「村研号」の新方向が、会員三四三名のうち、一〇〇名に満たない会員で決められているという事実が印象的であった。勿論、やむを得ないことである。また、大会不参加の村研離れでもないが、三分の二にも及ぶ会員が新方向をどう見ているのか、気にな

るところである。今後一層、より多くの会員が関われるような、多様な学会活動が求められていると思う。村研の伝統をどう活かし、多様な会員のエネルギーをどう引き出すか、まだまだ課題は多いというのが、私の印象である。

最後に、米沢先生をはじめとする大会事務局の方々、本当にご苦労様でした。深く、感謝いたします。

(弘前大学)

## 一九九二年度 第五回運営委員会記録

日時 一九九二年一〇月二八日

場所 牛深市総合センター

出席者 我孫子麟、長谷川昭彦、大沼盛男、岩本由輝、藤井勝（北原代理）、松田苑子、高橋明善、河村能夫、佐藤康行、安原茂、若林敬子、細谷昴、磯辺俊彦、吉沢四郎、鳥越皓之、米沢和彦、柿崎京一、徳野貞雄、武田共治。

### 審議事項

- 一、事務局から出された「組織改革素案」にもとづき、「組織改革原案」づくりの審議を行った。
- 二、会費値上げについての審議。

## 一九九二年度 第六回運営委員会記録

日時 一九九二年一〇月二九日

場所 牛深市総合センター

出席者 我孫子麟、長谷川昭彦、大沼盛男、相川良彦、岩本由輝、藤井勝（北原代理）、松田苑子、高橋明善、河村能夫、佐藤康行、黒崎八洲次郎、安原茂、若林敬子、細谷昴、交野正芳、大川健嗣、磯辺俊彦、吉沢四郎、松岡昌則、鳥越皓之、米沢和彦、柿崎京一、徳野貞雄。

### 審議・報告事項

- 一、事務局から、以下の点について報告と提案があった。①大会プログラム、②次期事務局候補として神戸大学（北原淳、藤井勝）が上がっていること、③次期大会は北海道になること。これらの点について了承された。
- 二、国際交流委員会から「国際農村社会学会」について報告があった。アジアの組織化が課題となっており、その準備組織として Asian Rural Sociology Working Group が結成され、鳥越皓之会員がその Chairman になったと報告された。そして次のことが提案され、了承された。①村研がこれらの国際機関に対し、日本の農村社会学の組織的な意味での代表機関となること。②それにともない、右記 Working Group への組織委員推薦につき、国際交流委員の松田苑子会員が推挙された。③韓国の農村社会学会から文献紹介の依頼があった。
- 三、編集委員会からの報告と審議。以下の編集委員を補充したい旨の提案があり、了承された。細谷昴、岩本由輝、鳥越皓之。
- 四、第五回に引き続き、大会に提出する「組織改革原案」について審議した。

## 一九九二年度村落社会研究会総会

日時 一九九二年一〇月二九日  
場所 熊本県牛深市総合センター

- 一、議長に磯辺俊彦会員を選出した。
- 一、議事

### I 一九九一年度事業報告(事務局)

#### ◎運営委員会の開催

- 第一回運営委員会(一九九一年一〇月一日)
- 第二回運営委員会(一九九一年十一月二九日)
- 第三回運営委員会(一九九二年二月二日)
- 第四回運営委員会(一九九二年六月六日)
- 第五回運営委員会(一九九二年一〇月二八日)
- 第六回運営委員会(一九九二年一〇月二九日)

#### ◎研究会の開催

二回開催した(一九九二年二月二日、同七月一八日)。

- 関東・東北地区研究会(一九九二年六月六日)
- 中部・近畿地区研究会(一九九二年五月九日)
- 東北地区研究会(一九九二年六月一三日)

#### ◎宿題委員会の開催

#### ◎「研究通信」の発行

- 第一六七号(一九九二年一月二〇日付)
- 第一六八号(一九九二年五月一五日付)

第一六九号(一九九二年八月二二日付)  
第一七〇号(一九九二年一〇月一日付)

### II 編集委員会報告

◎アンケート結果について(吉沢)

### III 国際農村社会学会報告

◎大会報告(長谷川) ペンシルバニアで大会が開かれ、村研から多数の参加者があり、盛況であった。

◎Asian Rural Sociology Working Groupについて(高橋)  
内容は、第六回運営委員会記録にあるとおり。

### IV 事務局報告(鳥越)

◎臨時会計処理についての報告大会事務局から会計の逼迫している事務局に八万円が支払われた。

◎本年度大会自由報告についての処置

◎会員動向入会八名、退会六名、現在会員三三八名。

### V 会計報告(事務局、会計監査「西村」)

◎一九九二年度決算、一九九三年度予算が別掲のとおり承認された。

### VI 会費値上げについて(事務局)

◎会費六、〇〇〇円(大学院生四、〇〇〇円)が承認された。

Ⅶ 村研の組織変革について(運営委員会)

◎別掲のような組織変革案が運営委員会から出され、承認された。村落社会研究会は日本村落研究学会と名称変更され、正式に学会と名のことになった。それにともない、会長職を置くことになり、現運営委員会代表の柿崎京一会員が会長になった旨、運営委員会から報告があった(ただし、次期運営委員改選までの一年任期)。

◎正式の会則は次期総会に提出され、事後承認の形式を取ることになり、とりあえず、「組織改革案」を暫定会則として、活動することになった。また、会則作成は組織改革実行委員に依頼された。その委員名は組織改革原案にあるとおりである。

Ⅷ 年報編集委員会報告

◎第六回運営委員会報告のとおり。また、年報の購入について強い依頼があった。

Ⅸ 次期事務局、次期大会について

◎神戸大学(北原淳、藤井勝)が承認された。北海道で開催することが大沼会員から紹介され、それが承認された。

付 村落社会研究会組織改革(原案)

一九九二年一〇月二十九日  
運営委員会

一、名称変更等について

- (1) 本会は、名称を「日本村落研究学会」(通称、村研)とする。英文名は、Japanese Association for Rural Studiesとする。
- (2) 日本村落研究学会として、会長職をおく。
- (3) 会長職は、理事会(後述)で選出し、総会で承認を受けるものとする。

二、理事会の委員任期制の施行

- (1) 日本村落研究学会に、理事会をおく。
- (2) 理事は、二〇名程度とする。
- (3) 会長および理事の任期は二年とし、三選を認めない。
- (4) 理事の担当制をとる(企画担当理事、編集担当理事、庶務担当理事など)。

三、大会テーマについて

- (1) 当分、特定の大会テーマを設けず、自由報告を重視する。
- (2) 複数の会員による自主的なグループ研究を奨励し、成果のあるものについては、そこのテーマを全体のテーマとする。
- (3) 「宿題委員会」にかわり、新会則で「研究委員会」を設置し、大会および研究会のあり方を検討し、活動を推進する。

四、編集委員会の改組について

- (1) 編集委員会は企画機能を強める。
- (2) 編集委員会は、次年度の年報のゆるやかなテーマを、大会時まで設定する。

(3) 編集委員会は、上記(自主的なグループ研究)の成果を重視し、それを年報として出すこともあり得る。

五、宿題委員会について  
宿題委員会は解散する。

六、年報代について

現在のところ、以下の二案が出ている。

- (1) 年報代を会費の中に入れる。
- (2) 従来通り、年報代は会費の中に入れない。

七、以後の作業について

- (1) 総会によって全権委任を得た「組織改革実行委員会」を形成し、速やかに、会則作成の作業にはいる。
- (2) 会則承認は、次年度大会における事後承認にし、新体制で活動を開始する。
- (3) 総会で以上の趣旨どおりの承認を得た場合、本年度は移行体制として、会長、事務局長の執行部体制と、それを支える理事会、それに加えて、現存の編集委員会、国際交流委員会が機能する。
- (4) 新「編集委員会」は暫定的に現「編集委員会」が担当せざるをえないが、必要を感じれば、本大会期間中に、新趣旨に沿った編集委員を補充し、理事会の承認を得る。
- (5) 新会則で研究委員会の委員が選ばれるまでは、暫定的に会長および事務局がその任にあたる。

(6) 編集委員会は、年報及び村研通信の今後のあり方について検討する。

(注)

「組織改革実行委員会」

鳥越(旧事務局)、藤井(新事務局)、柿崎(関東)、細谷(東北)、大沼(北海道)、徳野(中国・四国・九州)

### 会費についてお願い

一、会費値上げについて

一九九二年度総会決定により、一九九三年度会費は六、〇〇〇円(大学院生 四、〇〇〇円)に改定されました。御送金の際にはお間違えのないようお願いいたします。

一、送付者不明会費について

送付者の不明な会費(四、〇〇〇円)が前事務局以来、保管されています。払込人は「青山学院女子短期大学(渋谷区渋谷四一四―二五)」となっていますが、該当者は存在しません。振込日時は一九九一年一月二十九日で、振込場所は「渋谷青山通」郵便局となっています。お心当たりの方は事務局までご連絡ください。

1992 年度決算案

(1991.10.8~1992.10.21)

1. 収入の部

科 目	91年度決算	92年度予算	92年度決算	決算-予算
前年度繰越金	950,006	181,494	181,494	0
会費収入	1,372,000	1,344,000	823,000	△ 521,000
利息	8,737.0	10,000	1,968	△ 8,032
雑収入		0	0	0
計	2,330,743	1,535,494	1,006,462	△ 529,032

2. 支出の部

科 目	91年度決算	92年度予算	92年度決算	決算-予算
「研究通信」印刷費	1,129,910	710,000	603,477	106,523
「研究通信」郵送料	336,519	263,500	261,465	2,035
「会員名簿」印刷費	0	0	92,700	△ 92,700
その他印刷費	71,111	50,000	22,209	27,791
連絡通信費	101,719	90,000	48,150	41,850
編集委員会費	10,880	20,000	0	20,000
会議費等	12,295	15,000	23,947	△ 8,947
講師謝礼	30,000	30,000	40,000	△ 10,000
交通費補助	193,000	130,000	85,000	45,000
消耗品費	25,315	20,000	2,859	17,105
事務謝金	31,500	30,000	30,000	0
事務局交通費	175,000	150,000	79,510	70,490
雑支出	32,000	0	0	0
小計	2,149,249	1,508,500	1,289,353	219,147
次年度繰越金	181,494	26,994	△ 282,891	△ 309,885
合計	2,330,743	1,535,494	1,006,462	529,032

1993 年度予算

1. 収入の部

科 目	92年度決算	93年度予算	備 考
前年度繰越金	181,494	△ 282,891	
会費収入	823,000	2,012,000	6,000×320人 4,000×23人
利息	1,968	6,000	
雑収入	0	0	
計	1,006,462	1,735,109	

2. 支出の部

科 目	92年度決算	93年度予算	備 考
「研究通信」印刷費	603,477	650,000	14万×3回、23万1回
「研究通信」郵送料	261,465	280,000	(175×3、250×1)×343
「会員名簿」印刷費	92,700	0	
その他印刷費	22,209	30,000	連絡書類、封筒印刷
連絡通信費	48,150	60,000	連絡用ハガキ、切手
編集委員会費	0	20,000	
会議費等	23,947	20,000	会場使用料
講師謝礼	40,000	40,000	会員外の講師謝礼
交通費補助	85,000	150,000	会員交通費補助
消耗品費	2,895	20,000	
事務謝金	30,000	35,000	アルバイト費
事務局交通費	79,510	150,000	委員会、地方研究会出席
雑支出	0	10,000	
小計	1,289,353	1,465,000	
次年度繰越金	△ 282,891	270,109	
合計	1,006,462	1,735,109	

## 村研の改革と課題について

柿崎京一

ここ数年来、村研の運営にとって解決を迫られているいくつかの課題が持ちこされてきた。その最大の難題は、年報の売行き不振から現行の編集では今後の刊行を辞退したいという出版社からの申し入れである。こうした事態には過去にも一度ならず遭遇していたが、これまでは幸い他の出版社に引き受けてもらうことよってのりこえてきた。しかし、現状では、過去の便法は到底通用しないきびしい出版状況である。年報は村研の研究活動を支える重要な基盤であり、その刊行は村研の存続にとって至上要件であるとしても、もはや理想だけでは対応できないところまで追いつめられている。

また、村研設立当初からの伝統である「むずかしい規約ではばることほしない」で、「自由で、肩書を考えまい」(有賀「研究通信・創刊号―第五〇号」の刊行に際して―一九七二・一〇)という精神にもとづく組織に、軌道修正の求められていることも無視しえなくなってきた。その直接の端緒は、日本学会の「必要にあらば、登録に際しての、組織整備(規約・会長制など)の必要にあらば、その後、国際交流を含む村研の対外活動や、村研事務局担当委員の所属大学・研究所、大会開催地の自治体等との接渉時に際して、「会長不在、研究会名称」では「学会」として認知されにくいという事実が指摘されてきたこともあげられる。

とくに前者の年報刊行の一件は、もはや一刻の猶予も許されぬ事態となり、これに連動して後者の組織改革を含め、村研全体の改革

案が第四〇回大会時の運営委員会で討議された。その結果、村研の名称を「日本村落研究学会」(通称「村研」とし、会長職を設置し、会長・理事の任期及び再任規定、理事の会務(企画・編集等)担当、国際交流・研究委員会の設置等が本大会総会において原則的に承認された。その際、最大の課題である年報の編集については、大会報告の在り方を含めて次回大会総会まで引き続き検討することにした。

以上が、今回実施した村研改革の経過のあらましである。総会に出席されなかった会員は勿論のこと、当日出席会員の中でさえこの改革になお釈然としない思いを抱いた方もあろうかと思う。とくに村研の名称と、会長職の制度化については疑問視する会員も少なくないように思う。当日の運営委員会でも、会長職については異論もあり、「偉くない会長」ということで落着いた。つまり、会長職は形骸化し、対外的な接渉時の最小限度の役割にとどめ、研究会活動における会長の出番を極力排除することを前提にするという理解である。とはいえ、村研発足当時の研究通信に載せられている諸先輩の村研に寄せる自由な学問への情熱に接するとき、会長職を引き受けることになったことに忸怩たる思いを禁じえない。

村の現実はいまや破局的状況である。いまこそ村研の初心にたぢかえり、「われわれは丸はだかな人間として、心と心を触れ合わせ」(有賀・前出)議論を通して、実証的・学際的研究を進め、村や農民の将来に展望を拓く理論的・実践的成果を構築することが重大かつ緊急な責務であると思う。この課題に向けて、四〇年に亘る先達の築いた村研の伝統を基盤に更なる発展の捷徑を、会員の創意によって築くことを心より願ってやまない。

(早稲田大学)

## 一九九三年度第一回理事会

◎日時 一九九二年一〇月三〇日

◎場所 牛深市総合センター

### 審議・報告事項

一、編集担当は吉沢四郎・長谷川昭彦両会員に、国際交流担当は高橋明善・松田苑子両会員にひきつづきお願いする。庶務はとりあえず事務局が請け負い、必要があれば来年度以降庶務担当理事を設ける。研究会担当については、さしあたり会長・事務局を中心に、各地区の理事にも協力を仰ぐ。

二、各理事から、つぎのような意見が出された。大会の共通テーマをなくすけれども、一九九二年度の《日韓比較》からの発展も考えたい。家族・村・生産などの諸側面において比較研究が進められるようにしたい。大会テーマはなくとも『年報』にはテーマ性があつていい。またグループ研究（《国際比較》《女性と家》等）の奨励もすべきだ。

三、大会報告の希望が相当増えてきているが、来年度大会の報告の形式は、いまのところやはり分科会にはしない方向である。複数の会場間の移動が激しくて好ましくないことがありうるからである。原則として、報告希望者は全員受付としたうえで、討論の保障・時間調整を考える。発表のルールづくりは理事会の検討課題である。

四、次年度大会は北海道で開催する。担当は札幌学院大学である。

（文責野崎）

### 次回大会のお知らせ

次回の大会にむけて、現地ではすでに準備が始まっていますが、現在のところ、おおよそ以下のように予定されております。ご期待ください。

一、期日 一九九三年一〇月上旬

一、会場 北海道網走管内女満別町

一、事務局 札幌学院大学（事務局代表 酒井恵真）

☎〇六九 江別市文京台一

☎〇二一三八六一八一（内線四七〇二 社会調査室）

### アジア地区農村社会学ワーキンググループの発足

松田（熊谷）苑子

昨夏ペンシルバニア州立大学で開かれた国際農村社会学大会（IRSA）第八回大会のプログラムの一環として、大会二日目の八月一三日に地区別の会合（Regional Assembly）が組み込まれていた。地中海地区、アジア地区、ラテンアメリカ地区、ヨーロッパ地区及びアフリカ地区の会合である。アジア地区以外には恒常的な組織（association）なごしはsocietyと称する）が形成されている。アジア地区

にかんしていえば、前回ボローニャにおける第七回大会の際アジアからの参加者が会議のあいまに顔を合わせて交流について話し合つて以来のことである。ただし、この四年間、アジア地区農村社会学者のネットワーク形成にかんして、村研国際交流委員会委員長の高橋明善会員により交渉と準備が進められてきていたのはご存じのとおりである（通信第一六四号・一六七号参照）。高橋会員は国際農村社会学会アジア地区選出理事の王仁權氏（韓国）と連絡をとりながら、昨四月にはアジア各国の農村社会学者に書簡を送り、第八回大会への参加を呼びかけネットワーク形成を提唱された。

八月二三日の会合には、韓国、台湾、タイ、フィリピン、インド、インドネシア、日本などからの参加者約五〇名が集つた。ネットワークではなく、最初からアソシエーションと呼べるような構成と活動内容をもつ組織をスタートさせてはどうかという声もあったが、議論の結果、現実的な路線として高橋明善会員の用意された組織案にのつとつた、アジア地区農村社会学ワーキンググループ（Asian Rural Sociology Working Group）の発足が決定された。ワーキンググループの目的は、アジア各国の農村社会学者の交流と相互理解である。同時に、国際農村社会学会からはヨーロッパ農村社会学会など各地区のアソシエーションに対するのと同じようにニュースが提供されることになった。ワーキンググループのメンバーはこのグループへの参加費をおさめることをつうじて国際農村社会学会へもつながるのである。今のところ各国の研究者への呼びかけは緒にないばかりであるが、日本からは、先般の牛深での大会の折に三〇数名が参加を表明している。アジア地区以外の組織のメンバーで、アジア地区で調査研究を行っている研究者の参加も歓迎している。

このようなグループの形成により、国際的共同研究、比較研究への、相互理解による実りある途が拓かれていくことと望まれる。

ワーキンググループの議長国は日本で引き受けてほしいという要望が強かった。日本からの参加者たちも断わり切れず、これを了承し、鳥越会員が議長の任にあたられることになった。次回の国際大会までの四年間、組織づくりをされる。また、国際農村社会学会のアジア地区選出理事のポストのうちインド代表が任期満了で退任されたためにこのワーキンググループの代表として鳥越氏がアジア地区選出の三人の理事のうち一人となることになった。

（清泉女子大学）

### 変動する世界秩序の中の農村社会

（第八回農村社会学世界会議への会長講演）

ジャンパオロ・カテッリ

(Giampaolo Catelli, Catania University and Catholic University of Piacenza (Italy), President, International Rural Sociology Association.)

一九九二年八月一二日 Pennsylvania State University, University Park, Pennsylvania USA.

本日、一九九二年八月一二日に国際農村社会学会（IRSA）の第八回農村社会学世界会議が開かれることはまことに意義あることと

いなければならない。五世紀前の一四九二年に、私の国の同胞、Christopher Columbus が新世界を発見するため三隻の小さな船で西に向かって出帆した。彼の発見は世界の秩序を大きく変化させた。それから丁度五世紀の後の現在、世界秩序は再び広範な変化を遂げた。農村社会学の分野でも、われわれはこの世界会議で祝福し、活性化するために集まっているが、世界のすべての人々の間にもっと包括的な連帯性を保証するような種々の人間の社会組織の研究に従事してきた。

この会議は Pennsylvania で開かれているが、その位置は、Quakers 教とそのリーダーである、William Penn が自由を求めて定住し、Penn の "Sylvania" (それは Penn の森 "forest" を意味する) でコミュニティをつくった移民に与えられた意味にたいする豊かなアメリカの歴史のシンボルを思い起こす。この歴史と、現在、地球を席巻しつつある記念すべき変化とは、この第八回農村社会学世界会議をして農村社会学の分野の発展にもっとも重要なそして刺激的なイベントとさせることであろう。IRSA は四年に一度全世界の学者が参加して世界会議を開催する。本年の会議がコロンブスの航海とアメリカ発見とに符合することは二重の意味を持っている。

第一は、われわれの会議がペンシルバニアで開催されることは、この州がアメリカ合衆国の人々の歴史に親しまれているのみでなく、ヨーロッパと新世界の結びつき証拠でもあることに意義がある。ペンシルバニアへの移民はヨーロッパの人々とその文化とをこの新世界の形成のためにもたらした。さらに、ペンシルバニアは the Quakers の平和なそして非暴力的な文化と宗教的な不寛容さの故に他の国を追放された集団の移民の促進のシンボルである。それは正

確には、現在文明社会を規制する価値、アメリカの理想の基石となっている現世の civil 自由と寛容 tolerance のような価値が優勢となり、世界的に普及してきたことに意味を与えたのは William Penn と初期の the Quakers たちの聖なる実験の精神である。

第二の意味は、この会議のテーマである「変化する世界秩序の中の農村社会」と新世界の定住者たちの精神との結合である。今日われわれは、William Penn の「聖なる実験」の精神に見られる兄弟姉妹的愛情と連帯の理想に集中した、新しいそして普遍的な秩序にたいする深い変化と期待との兆候を数多く見ることができ。これらの初期のヨーロッパ人のペンシルバニアへの定住者たちの精神は、すべての人民に現世のそして宗教的な自由の裏打ちをし、民主主義の追求を鼓舞していることである。今日変化しつつある世界秩序は、全世界の人々のグループがそのオートノミーを要求しているように、これらの理想と連続する成果を示している。そしてそれはまた、定住者の精神に見られるように、すべての人々が平等な尊厳を共有しうるような新しい普遍的な形態の社会秩序を確立する必要性を示している。かくて今日出現しつつある世界秩序は、その新しい構造はまだ脆弱であるが、一部の人々への自由のみでなく、また個人の自由のみならず、すべての人民の自由すなわち地域や世界の支配に直面して国民的政府によって彼らの identity と文化を保持しようとする人種的グループ化やその他の人民のための自由をも含めて、もう一度、自由の探求に焦点を結んでいる。今日、人々が努力しているものは、丁度初期のペンシルバニアと同じように、彼らの人種的 ethnic な、そして文化的な identity に関する防衛 safe guard である。すべての identity に対する尊敬は、非常に多様な、人類の継

統的な存在に対する置き換えることのできない世襲財産 *patrimony* として役立ち、多様なそして自律的な人民の間の関係の知識と質の連続する成長を保証することができる。

世界の人民は、それ故に、連帯を建設する新しい方途を探求している。この探求は必然的に、新しい型が古いものに直面したり、対立する *ideologies* が衝突したりするような問題を発生させる。そしてこのことは逆にすべての人々が平等な尊厳を与えられるような新しい秩序を発見する必要を高めてきている。拡大する民主主義の新しいフロンチアの上の自由の精神は今日、個人の自由の保証からすべての人民の自由と博愛と平等の保証へと広がっている。いまや終わろうとしている *millennium* (至福千年) は個人の自由を闘いとすることで大きな利益をもたらした。新しい *millennium* は、「人民」 *peoples* の自由に対すを獲得するための葛藤の時代となるであろう。この強調点の推移は農村社会学が直面しなければならぬ挑戦を表している。世界会議のテーマは、社会に於いて民主主義の建設の課題が未完成であり、未終了であり、それ故に将来追求されるべきものであることを示唆している。この挑戦の中心は、戦いとしてきた個人の自由を農村世界の人民 *peoples* と呼ばれる集団へと拡大することである。

その課題が終わっていないことは、貧乏が世界の人口の三分の二を占めていること、自由と尊厳が大量の農村人口に否定されていること、世界の各地で農村人口の福祉が改善されているのなく、むしろ次第に悪くなっていること、現在、このような時代にあることは明瞭である。多くの国では、農業分野は政策によって無視されている。無視されていないところでも、農業コミュニティが次第により

大きい中心に依存を増す政策をとっているところは多い。多くの研究が示しているように、このような依存性を増すにつれて、農村コミュニティは経済問題に関してその意思決定の力を失い、社会政策の上で大きな不利益を被り、不利な立場におかれることも多い。経済発展のプロセスにおいて、いわば、農村人口は、その村落さえ失って、小屋は倒され、家族は保留地に群がる。合衆国の初期の発展において土着のアメリカ人たちが保留地を割り当てられたことと似ていなくはない。

驚くべきであるが、一九八〇年代初期以来このような農村の条件の悪化は、自然環境の再発見とそれに代わる農業の普及とに結びついた農村生活への関心が平行して成長してきた。これらの平行した傾向は、この時期には、重みと重要性とにおいてバランスをとって現れる。農村人口の無視と世界経済の強力な分野による農業の植民地化とは、新しい国際的秩序の交流を評価する点で考慮されるべき危機的な要因として現れている。しかしながら、さらに、農村性の保存、それに代わる農業、そして農村世界への生態学的圧力は、大部分は、一層発展した西側の諸国の一種の歴史的記憶の研究分野として限定された現象であった。この関心は、重要性を増しているけれども、まだ皮相的なもので、人々が現実生活に結びついてはいないが、まだ戦略的な事柄にはなっていないかった。

二〇世紀の終わりのこの数十年の間に多くの国に起こった政治構造の深刻な変化は農村世界における生活条件、殊に農業分野の危機的状况と直接にそして劇的に衝突する。われわれが立証しようとすることは、農村人口が蔓延する貧乏やその他の無視と搾取の結果によって悩まされている世界における新しい政治的秩序を探求すること

とである。変化する世界秩序は、また世界の環境の公害に結びついた重大な生態学的変異 *mutation* と論争しなければならない。さらに、経済的視点からは、新しい秩序の探求は農村生産物の価値の低下と流通や商業に従事する大企業の富や力の増加の時期に起こっている。これらの方途のすべてにおいて最近の事件は発展過程の否定的なそして無制限な傾向に衝撃を与え、加速している。それには、殊に国際的な会社の行動に示されているように、更新されたそして極端な資本主義の攻撃性が含まれ、有限の環境的資源の搾取の道を開くことに献身しているような一部の企業を含む新しい独占とその他の経済的複合企業 *conglomerations* をつくりだそうとする絶えざる動きを含んでいる。

この攻撃やその他の農村世界を悩ますイベントに直面して、現代文化はその方向感覚を喪失し、政策は良い世界を建設するよりも依存性を建設することに方向をとっているように見えるし、多くの国民のリーダー達は経済のコントロールのための新しい社会的規制を創造し、保持することが事実上不可能になっている。同様に、変化する社会は、貧弱な資源と僅かな成功の望みしかないが、事実上の社会病理の氾濫と家族やコミュニティ生活における広範なそして多様な無気力に対して闘わなければならない。さらに、その問題がエスカレートしていても、その強度はむしろ強くなっていくような大きな変化が農村人民の未来に対する新しいシナリオのデザインを示唆している。急速な変化は混乱と苦惱を生み出すが、希望をも生み出す。——その希望とは世界の諸般の中心的事情において飢え、貧困、麻薬、犯罪そして公害への戦争が軍事的戦争や経済的ヘゲモニーにとって代わるだろうという希望である。実際、変化する世界

秩序の挑戦が遭遇するならば、暴力的戦争はこれらの問題に対して闘われなければならない。

これらの変化が正当化する希望は、すべての人への自由と尊厳の追求を国民的レベルから国際的なレベルへと変形させていくプロセスに農村の人々を参加させることに主として現れるであろう。明らかに農村の人々は、丁度最近のイベントではこのような遥かな変化を引き起こしてきた主要な俳優 *key actors* であったのと同じように、いたるところで未来への戦略に含まれなければならない。

実際、農村人口はこの広範な人口移動とそして様式とイデオロギーにおける全面的な変化の時代において重要な社会構造を与えている。すべての他のものが流動する状態の中で社会の構造に関して残存するのは家族、集団、町村 *boroughs*、コミュニティそして村落における日常の社会関係の構造である。——その社会関係は農村世界の基礎的な特徴によって古代から支持され *sustained*、未来へ伝搬される。さらに、遠い飛び地として孤立したり、純粹の遊牧地として社会から分離していない限り、高度に複雑化し、多様化した農村の文化とコミュニティの形態とは未来の社会に決定的な影響をもつであろう。

マルキシズムの *"rural idiosyncrasy"* は、都市生活の質と農村孤立化の影響を過大評価しているが、メリットもないし、支持できない。農村の人々の集団は相互に高度に相違している。彼らが接触する他の集団とは違っているが、そして農村空間への歴史的適応と特徴づけられるが、それらは独特の文化と価値をもっている。そしてそれは組織において豊かであり、未来の世界秩序に貢献する潜在能力は強い。同様に、多様化した農村の人民 *peoples* の存続については、

大衆社会においては農村の人民 *peasants* は、都市と農村の空間の深刻な構造的変化によって、過去から現在まで集団的統一性と価値への親近性を失ってきたという、今ではあまりはやらなくなつた大衆社会における成長する齊一性の理論とは矛盾する。農村無視の傾向が進み、農村の人々が世界の経済と政治的システムに機能的に依存する傾向は増加しても、農村の多様化と農村社会構造は存続するのである。

この主題に関する一九七〇年代および一九八〇年代の経験的調査研究は、いかに農村と都市地域の接近とメトロポリタン地域のその後背地への侵入とがその家族やコミュニティ関係における農村の人々の多様性と基礎的社会慣行を本質的に変えなかつたということを示してきた。農村生活はその中核部分は血縁やその他の連帯的關係の厚い網をもち続けてきた。産業社会でさえこの中核部分は福祉の保持に役立ち、機能的な依存性の成果を無気力化 *debilitating* する事に反対し、抵抗することに決定的な重要性を持っている。明らかに、誤解はほとんどないと思うが、農村の人々はどこにおいても経済的政治的力が弱まり、経済的政治的搾取の犠牲者になってきたことを認めなければならない。また、彼らは彼らがこうむる従属 *oppression* と絶えざる損失にたいする見返りをほとんど受けとらないことも注意すべきである。そしてしかも、農村の人々は、種々な *identities* をもっているもので、同時に爆発しやすく、そして不安定な社会的潜在能力 *potential* を構成している。彼らは直接日常的に自然環境に接触している。彼らは所有物や隣人との協力の価値の運搬者でもある。彼らの面接的關係は、現実や社会生活へ人々のオリエンテーションが埋没される *being submerged* という点で事実上

近代化へ進むことはできないほど非常に構造的である。このような農村世界全体を事実上特徴づける強力な価値に加えて、ある人々が弱点と呼ぶような、忍耐、独特な間の取り方としての恒常性 *constancy*、美や環境に対する自然の感覚としての謙遜 *modesty* というような価値をもっている。これらは農村の人民によって連うが、各々の集団化に独自性を与え、彼らの社会化 *socialization* の土台に横たわっている潜在的な構造を保護するのに役立つ。このような弱点としての価値は農村の人の心臓部であるし、農村生活変化の後 *lag* を形成する。

膨大なそして錯綜した国家間の政治的盟約のなかに途方にくれ、メトロポリタンな領域や大きく公害を受けた生態系に従属せしめられた農村空間に散らばっている何百万という人々に代わって、農村社会学は科学的合法性 *scientific legitimacy* と政治的社会的有用性 *utility* の研究を進めなければならない。一方では、農村社会学の分野の内外の農村社会の論点や問題を理解し、解決する為に、理論においても方法においても、従来テクニカルな用具が適切であったか不適切であったかとい問題に取り組まなければならない。他方では、この分野は、農村社会学が関係する時代は終わったと示唆する人々の問題に直面し改めて追求しなければならない。その問題は応用分野の基礎についてのラジカルな再評価の問題を呼び起こすであろう。すなわち、農村社会学は存続し続けることができるのか？そして今日の都市的世界システムにおいてそれは存続し続けることができるのか？確かに、農村社会学者は存在するし、研究は、人々と農村的環境の間の関係のような、根本的な農村問題を探求し続けるであろうことは疑いがない。しかしわれわれをリードする分析は

どこにあるか、そしてそれは何に貢献できるのであるか？

その研究分野は、丁度それが発展する事ができるように、消滅することもできるということ、農村擁護論のようなイデオロギーや農村福祉を前進させる科学の利用は消滅することができるということ、複雑性が増大すると運動が成熟し、衰退すること、そして理論や方法は、それらがポピュラーで有用であっても、退化を急ぎ、新しいアプローチの犠牲になって、結局は忘れ去られること——このようなことを歴史も社会学も警告してくれる。研究の分野や用具を展望する一つの方法は、社会学は、その分野が多様化し、応用においてもさらに有用となり、そのアプローチはタイムリに貢献し、やがて消えていくというように、無限に拡大しうるほど開かれているということである。もう一つのこれを展望する方法は、もっと批判的な議論であり、社会学の分野のアプローチはいずれかの理論、方法、または応用の戦略におけるコンセンサスに貢献することなく増殖すること、そして技術的な増殖 *proliferation* は平凡や *banality* と無用性を生ずることである。農村社会学ではどうであろうか？

何年もかかって集めた農村社会学研究の情報のうち何が残るであろうか？ 科学や社会に対するその有用性とは何であろうか？ その答はそのフィールドの発展とその組織の間の関係を調べることによってえられるであろう。規模の大きい、費用のかかる研究が新しい知識の獲得にのみ捧げられるという傾向はその研究の質を退化させることを認めなければならぬ。新しい方法や理論を作り出すことにとりつかれることよりもむしろ農村の人々の底に横たわっている構造を見いだすことに関心を向けるべきであろう。この基礎となる構造を理解することが目的となるとき、研究の多様性と限界性さえも

が真の意味の農村社会学の分野の存在と社会的価値を運んでくれるのである。別の言葉でいえば、農村社会学の真の貢献はその後の目的によってあまりにも容易に混乱されうるのである。

今日、農村社会学を含めた社会学全体が農村の人民 *peoples* の生活に焦点を結び、一層純粋な研究に集中することから遠ざかっていく傾向がある。恐らくはその分野は伝統的なイデオロジカルな拠り所を超えるものとなる。しかし、この分野のオリエンテーションにおけるプロセスや変動にどんな力や要因が真に純粋な社会学の建設を促進するのであるか、また、応用社会学への新しい道を開くのであろうかという問題が残る。そして農村社会学は変動する世界秩序の挑戦を受けとめうるであろうかという問題もある。

農村社会学における新しいアプローチの発展は、過去における多くの研究を特徴づけてきた心の乏しい *mindless* 経験主義を超越すること、そして、われわれの仕事の目標としてきた単純な叙述やドキュメントを超えることが必要である。農村コミュニティの詳細な部分に集中することよりも、農村社会学は変化するコミュニティの中の集団と個人の間の相互作用を批判的にそして深く分析する事によって、自らを解放し、もっと有用とすることができる。

この方向における一つの段階では、われわれが観察するように、われわれの理論が考えるより以上に社会は錯綜した実体として存在することを認めることが重要で有益である。社会システムとして描いてきたものが境界を超えて、社会とともに全体的実体を形成する幅広く未踏の「外部」*exterior* が存在する。このより大きい全体における傾向は、一つの波が巨大な大洋に吸収されると同じように、社会的現実の中に吸収される。それ故、われわれの仕事は、

この一層大きい現実の諸型を探求し、解明するために社会システム  
の表面を超えていくことである。

この仕事を実行するためには決定論的方法よりは確率的方法を用  
いるなければならないと思う。相互作用主義理論が論ずるように、  
確率主義的方法はこの複雑で絶えず変化する社会的現実を説明する  
ことを許す唯一の方法であろう。われわれは社会関係において調和  
する型を探求しなければならない。そしてこれらを識別することは  
複雑なそして多次元の現実の中に存在する秩序を明らかにすること  
であろう。

これらの型は、社会を規制する常数(変わらざるもの)であり、  
コミュニティや集団が多く価値の中から裏打ちし、従って行くた  
めに選んだものとして以外にはそれを基礎づける理由を決定するこ  
とができないような、われわれの分析に帰せしめる不変の規範を反  
映していると思う。確率的方法を用いることによって明らかにした  
諸関係の構造はこの明らかにされた秩序に帰する。そしてこの秩序  
の注意深い研究は、最初は完全に別個のものとしてのみ現れた埋没  
した価値に導いてくれるであろう。

このアプローチとこの課題によって、社会を、われわれがまさに  
今解読を始めたところの埋没されたコード(暗号 hidden codes)の  
表現であるとみなすような純粹社会学の領域に入り込んでいくので  
ある。実存するどのコミュニティも、どの集団も、どの個人も社会  
関係へ参加する程度に応じてのみそうすることができる。社会関係  
においては社会的コードはまず人間 parsons に、ついで関係に、そ  
して面識の経験において構成される。複雑な社会はこのコード、こ  
の秘密のパターン、この謎 enigma を持っている。

最後に、その失われたアイデンティティを求めていかに農村社会  
学を農村世界の人々の研究に引き戻すことができるかと問わなけれ  
ばならない。その答は明瞭で、単純である。農村地域の人々を研究  
することによって価値の相違を分析し、直面することができる。そ  
してこれらの研究は人間関係の隠されたコードを解くことに導いて  
くれるだろう。このようにして農村社会学の分野はそのアイデンティ  
ティを再建することができる。

農村の人々は生きる力を構成している。彼らは環境と社会とをほ  
んど結合している。そして彼らは伝統的文化と諸型の連続性とな  
ドミナントな特徴を持つ社会的領域を構成する。農村の人民の生活  
は自然の開発という論点から不可避的である。実際、農村の人民は  
今日の変化する世界において新しい世界秩序の探求の道へわれわれ  
を導いてくれることを要求しているという議論は道理がある。そ  
れと平行して、彼らは、絶えず増加する政治的圧力によって本質に  
おいて彼らに閉ざされている道を進まされている。農村の人民が変  
化する世界の環境を展望しようとする冒険は、世界戦略となりうる  
ような原理を規制する対策を与えることができる。

現代の社会的システムによって示された危機の入り口にあつて、  
殊に社会病理学や環境の破壊のコントロールが不可能であるとい  
うことによって示されているように、未来に対して二つの可能な出口  
があるのみである。その一つは、社会システムが人民の大きな波や  
異なった人種的集団の間の闘争によって破壊されるであろうという  
こと、その二は、新しい制度的な秩序が国民や国家を基礎としな  
いで人民を基礎として作られた優れたレベルの組織とともに発生す  
かである。その役割がエネルギーや環境を浪費し、破壊することか

ら成り立っているような浪費的社會構造 squandering social structure は、環境が再生され、進歩したそしてバランスの取れた均衡を求めるように、いまや環境を人民の手に引き戻すべきであり、人々は環境に戻るべきである。このことは、われわれが学者として農村社會学者としてまさに要求される深い意味を持った新しい挑戦なのである。

〔感謝：Ken Wilkinson のコメントと示唆に、そして Marielena Selvaggio の翻訳〔英訳〕に感謝し、本論文の序説的議論に対して我が妻 Paola Spisni に礼を述べたい。〕

(長谷川昭彦訳)

### 田原さんを偲ぶ——追悼・田原音和会員——

安原 茂

村研年報編集委員をお願いしていた田原さん（私にはこのようにしか呼びようがない）とは、村研で長いおつきあいであった。いつ田原さんと識り合ったのか、いま思うとさだかではない。村研通信の復刻版でたしかめてみると、田原さんは村研通信第一号の会員名簿に東北の会員として、中村吉治、竹内利美、菅野正さんらとともに名前が紹介されている。村研草創期からの会員歴をうかがうことができる。村研には私も何かと早くからかわっていたからどこかの大会で顔を合わせていたかもしれないが、はじめて二人が自覚的に接するようになったのは愛知県蒲郡でおこなわれた第八回大会の

ことであつた。この大会で田原さんは「東北農村における地主制と政治体制」について報告され、私は新潟県吉川町の調査報告をさせて戴き、いずれも一九六一年刊の年報に掲載された。大会発表ということでは田原さんと私は村研同期生であつたといえようか。おそらくそれから村研大会の都度顔を合せ、親しくしゃべり合つてきたのであつた。

周知のように村研大会では合宿研究会の間に懇親会がある。田原さんは平素は白哲の、昔の美剣士を思わせる端正な面立ちで、その物言ひも深湛、的確なものでこちらに下手な隙があればヤツと一太刀浴びせられそうな姿であつたが、懇親会の席が深まると、打つて變つておそろしく快活、闊達となり、田原さんより早く故人となつた山形大学の勝又さんと一しよに何時間も私に明るい物言ひで論議をしかけられ、いささかお神酒の入つた私も劣らず応戦するなどのことをなつかしく想い出す。

共同体論について田原さんは村研通信三〇号に「感想」を投稿しておられるが、この問題提起は村研のなかで必ずしも十分につめた形で検討されてこなかつたことも思い出され、くやまれることである。

フランス留学の後であつたか、田原さんから著書『歴史のなかの社會学』を惠送戴いたが、その〈あとがき〉のなかで〈社會学という学問の認識論的な吟味〉の必要に閑説しておられるが、定評ある『社會分業論』の訳者である田原さんは、農村社會の実証研究を重ねながら（その成果のひとつが共著の『東北農民の思想と行動』である）、社會学理論との架橋をもつねに考えておられたのである。おそらく〈日本農村社會学〉の〈社會認識論的吟味〉は田原さ

んのこれからの大きな宿題であったと思われるが、その業の半ばにして田原さんはたおれた（との思いが深い）のは、田原さんにとっても、私たち村研会員にとっても口惜しい限りである。

田原さんの農村調査のフィールドのひとつは庄内農村で、菅野正、細谷昂両会員との共同の仕事としてまとめられているが、仄聞するところによると、この三人は調査行の車中でつきることなく論議し合っていたとうかがう。田原さんのデュルケム、菅野さんのウェーバー、細谷さんのマルクスなどと考えてみると、旅行中の論議は田原さんにとってまた楽しいひとときであったと推量される。その点では良き共同研究者に恵まれた田原さんのお仕事は辛いながらも心楽しいものであったろうと微笑まれるのだが、それにしても、社会的認識論展開の途次にあった急逝は惜しまれて余りあることである。田原さんの御冥福を祈るばかりである。

（成蹊大学）

## 会員の出した本

『戦時下の日本——昭和前期の歴史社会学』

（行路社、一九九二年）

本書は、戦時下日本研究会の一五名による共同労作である。欧米における歴史社会学の隆盛に触発されながら、昭和前期という日本人の「最も切実な体験の時代」を対象としたものである。民族、人口、行政、文化、女性、宗教の六つの領域に二〜四のトピックスが

配列されている。

たとえば、民族の項の中久郎「『民族協和』の理想——『満州国』建国大学の実験」は、「八期生として入学した最後の学生」「在学期間わずか半年」である著者が、満州国の理想と現実の確執を建国大学の展開のなかにとらえようとしたものである。大学の教授陣のなかに皇国史観に拠る主流（現実）と民族協和を固有に追い求める若干の人々（理想）。もちろん、前者の優勢は否定しようもないが、後者は寄宿生活を送る漢、朝鮮、蒙古、ロシア、日本の学生の同窓社会のなかに根付き、生き続けていく。

女性の項には、蘭信三会員の「ある中国残留日本婦人のアイデンティティ」がある。長野県西筑摩郡榑川村の農家の長女幸子は、嫁探しに帰国した隣村出身の満州開拓団員S氏と結婚、翌々日昭和十六年二月に満州に旅立つ。順調な開拓時代、しかし二〇年、夫の召集によって生活は暗転する。そして、敗戦、難民生活、子供の死。しかし、「生きておれば必ず会える」という夫の言葉を信じて生き延びようとする。生き抜くために二一年、中国人と結婚。二八年の最後の集団引き揚げを、子供のために断念。翌二九年、日本からの手紙で夫がすでに復員しており、妹と結婚したことがわかり落胆。引き続き日本人として中国社会のなかで生きることを決意する……。幸子の生活を赤糸としてその時代と社会が立体的にえがきだされ、読む者の心を奪ってしまう。著者の長年にわたる開拓団の調査研究があったればこそと思う。それにしても、幸子が残留生活のなかで唯一の支えとした「日本人のアイデンティティ」に時代の悲劇を感じずにはいられない。

（岩崎信彦）

会 員 異 動

〈新入会員〉

池田 寛二(日本大学)

市川 雄輝

加藤 眞義(東北大学大学院)

木村 都(奈良佐保女学院短期大学)

國方敬司(山形大学人文学部)

☎ 九九〇 山形市小白川町一丁目四一四一 山形大学人文学部

☎ (〇三三六) 三二一四二二

レイモンド・ジュソーム(ワシントン州立大学農学部・

金沢大学経済学部)

永野由紀子(東北大学)

西山 未真(千葉大学大学院)

平田 順治(熊本大学)

吉野三喜郎

〈所属住所変更〉

浅野 慎一(神戸大学発達科学部)

小内 純子(札幌学院大学)

〈住所変更〉

井上 和衛

木村 武司

山本起世子

〈退 会〉

谷口 肇

〈死 去〉

川越 淳二

〈住所不明〉

高橋 五郎

渋谷 長生

矢田部 武男

〈会員名簿の訂正・追加〉

加藤 光一 (所属) 札幌学院大学

佐藤 康行

### 村研年報編集委員会からの報告とお願い

第二九集の研究動向の執筆者が次のように決まりました。会員の最近の業績の抜刷やコピーを次の方々に至急に送って下さるようお願い致します。

史学・経済史学

嶋田 隆

経済学・農業経済学

大森 正之

社会学・農村社会学

武田 共治

民俗学

平田 順治

外国研究(イギリス)

國方 敬司

### 事務局より

一、執筆者諸兄姉へのお願い

村研通信の原稿をワープロで入稿なさる場合には、フロッピーディスク(FD)と印字原稿の両方を御送付くださるようお願いいたします。FDは主要六メーカー(シャープ・東芝・NEC・富士通・サンヨー・キャノン)のものかMS-DOSファイルなラどれでもかまいません。

一、新事務局へのファックス送信は次宛にお願いいたします。ご利用の際には、「日本村落研究学会事務局宛」をご明記ください。

ファックス ○七八一八八一―八三三八